

リウマチ・膠原病内科

部長 公文 義雄

はじめに

日々の診療データをまとめる時期になり、今年一年の当科のサマリーをご報告させていただきます。

コロナ禍も5年が過ぎ、予防接種やインフルエンザを含めた感染症をめぐる環境も大きく変わり、環境因子に影響を受けやすい膠原病の一側面を実感しながらの日々でありました。些細な出来事から ER を受診された患者さんや救急搬入された患者さん、また、内科の中でも抗がん剤使用中の科や、関連科などよりご相談を兼ねてよくご紹介頂きました。また、難治性の関節炎として、整形外科などの地域医療をお支え頂く多くの先生からも今年もご紹介頂きました。お世話になりました全ての先生方にこの場を借りて御礼を申し上げます。

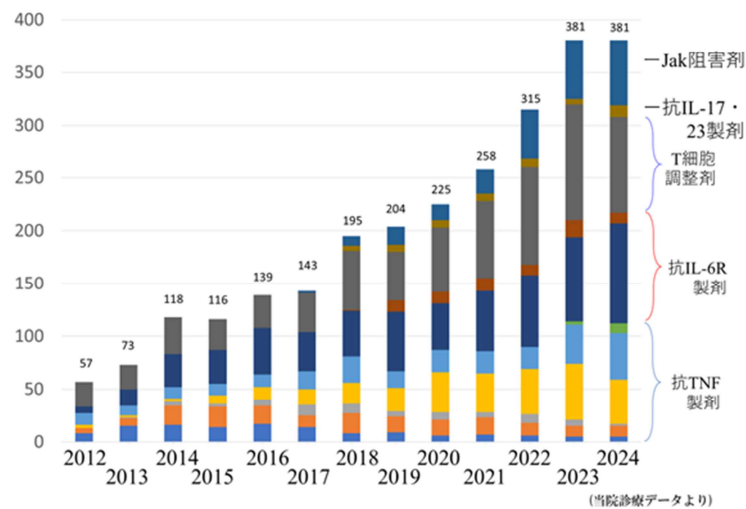
診療の実際

当科の吉田剛先生が2024年7月から米国に留学され、総合内科の中山修一先生が兼任して当科の診療を担って下さっております。非常勤の近澤宏明先生のヘルプはあるものの、2024年後半は実質1名減となり、一部の先生方にはご不自由をお掛けしたかもしれませんが診療ニーズには変わらず対応できてきております。この間、他院からご紹介頂く患者数は減らずに増加しており、常々心がけてきた安全な治療も継続できたことに感謝申し上げます。

当科で使うエンドキサンやリツキサンなどの治療人数は減っておらず、所謂難病患者さんの受診は減ってはおりません。

毎年お示ししております、リウマチ診療に必要な生物学的製剤や Jak 阻害剤の使用量の推移で当科の仕事内容をご理解頂きたい思います。関節リウマチ(RA)の中には治療に上手く反応しない難治性 RA, difficult to treat RA (D2TRA)が一定の割合で含まれており、これらへの対応が今後も一つの課題であります。他疾患の合併などもその原因と考慮されておりますが、原因や治療法も十分には解明されておらず手探りで治療が現状であります。単なる一免疫疾患と捉えず代謝を含め総合的に治療介入していく必要があります。2024年の使用薬剤は偶々前年と同数であります、種類により増減があり同じではありません。むしろ増加を抑えることができたことがこの一年の進歩だったのかもしれませんが。安全性の観点から今まで懸念されてきた Jak 阻害剤ではありますが、次第に評価は上がってきており、昨年度は使用全体の16%余りまで増えておりました。今後も更に増加することが見込まれます。

各生物学的製剤・Jak阻害剤の使用量の推移



各生物学的製剤・Jak阻害剤使用量の経年的推移

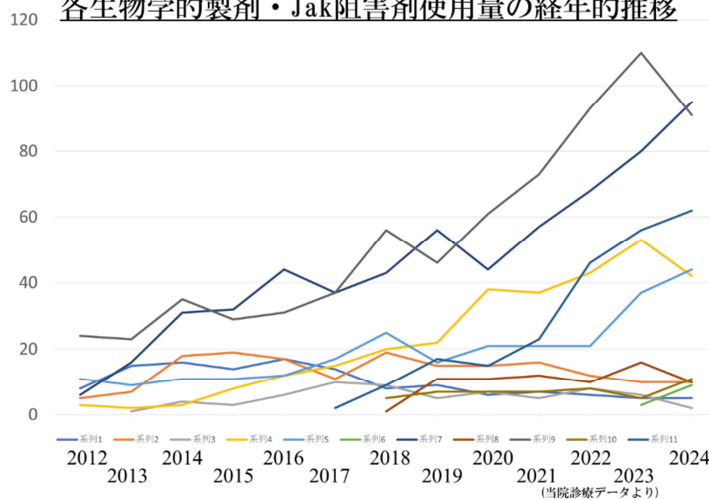


図 1.2. 生物学的製剤・Jak 阻害剤の使用量の推移

最後に

当科は自己免疫疾患をはじめ自己炎症疾患を対象にしている少数派の臨床科です。免疫となれば、治療はステロイドや免疫抑制剤とお考えの先生も多いかと思いますが必ずしもそうではありません。疾病の中心で悪さをする免疫細胞を抑え込む必要がありますが、他の薬剤を調整したり、薬物療法以外にも生活環境を調整することで効果が得られます。禁煙は当然必要ですが、腸内環境、腸内細菌叢を整える“腸活”と称される取り組みは大変重要です。免疫細胞の活動を安全に抑え込むにはこれらは重要であり、免疫細胞の活動エネルギー源を糖質・脂質・蛋白質からバランス良く取ることで、過剰な免疫機能を制限できる代謝(免疫代謝学)を誘導することで治療を実行すると安全な治療に繋がります。世界遺産に登録されている和食、地中海食などを取り入れ、健康的な食生活を実践されますことをお勧め致します。

本県は地理的にも恵まれておらず、医療事情は厳しいものですが、高知県全体で地域の先生と連携して“健康食”を推し進めていきたいと思います。ご意見がございましたらご遠慮なさらずお教え頂きたいと思います。

学術発表・講演会等

論文発表・著書

タイトル	執筆者 共同執筆者	掲載誌 出版社	巻・号 ページ
メディカルスタッフのための内科学 第5版	伊藤 進、高山 哲治 第12章：吉田 剛	医学出版社	P276-279

学会発表

演題	発表者 共同研究者	学会名	開催
Concurrent quantitative analysis of ultrasound and magnetic resonance imaging in patients with myositis	Takeshi Yoshida、Hiroki Yamazaki、Yuki Matsumoto、Naoko Takamatsu、Yuki Kanazawa、Yoshitaka Kumon、Ishizo Nishino、Yasuhiko Nishioka、Masafumi Harada、Yuishin Izumi	GCOM2024 5th Global Conference on Myositis	3月13日 ～16日 ビッツバーグ
当院で体軸性脊椎関節炎または SAPHO 症候群と診断された、HLA-B61 ホモ接合体患者、HLA-B54 ホモ接合体患者、HLA-B (54、61) ヘテロ接合体患者の臨床所見	答島 章公、鈴江 愛、伏屋 芳紀、米津 浩、公文 義雄	第68回日本リウマチ学会 総会・学術集会	4月18日 ～20日 兵庫
プロピルチオウラシル再投与後に薬剤誘発性ループスと ANCA 関連血管炎を生じた後、Systemic capillary syndrome を併発し死亡した1例	城 可方、吉田 剛、中山 修一、高田 智也、公文 義雄	第68回日本リウマチ学会 総会・学術集会	4月18日 ～20日 兵庫
高度肥満で壮年期に心房細動を合併した強直性脊椎関節炎の一例～本例の心房細動の発症に関する文献的考察～	公文 義雄、岡野 匡志、吉田 剛、中山 修一、近澤 宏明	日本脊椎関節炎学会第34回学術集会	8月17日 ～18日 大阪
当院で脊椎関節炎や SAPHO 症候群と診断された、HLA-B61 または B54 ホモ接合体患者、HLA-B(54,61)ヘテロ接合体患者の臨床的特徴	答島 章公、鈴江 愛、伏屋 芳紀、米津 浩、公文 義雄	日本脊椎関節炎学会第34回学術集会	8月17日 ～18日 大阪
血管炎の筋病変の検出における骨格筋 MRI と超音波検査の有用性	吉本 龍太郎、吉田 剛、中山 修一、谷口 義典、公文 義雄	第35回日本リウマチ学会 中国・四国支部学術集会	11月2日 ～3日 広島